

2 百萬塔陀羅尼經の調査

陀羅尼經の調査は經典としての内容の検討よりは、陀羅尼經の現状の確認を主たる目的として、頁数、法量、形態、紙質などの検討を中心にして行った。

百萬塔に納められた經典は無垢淨光陀羅尼經であるが、その陀羅尼經の内には經典としては根本陀羅尼經、相輪陀羅尼經、自心印陀羅尼經、六度陀羅尼經の四種類があり、また版としては、根本陀羅尼經に長短二種ありさらに長版に異種の版が二種類存在する。また相輪、自心印、六度についてはそれぞれに長短二種類の版がある。そこで法隆寺現存の陀羅尼經を經典の種類と版の種類にしたがって、九種類に區別整理することとし、それと同時に法量、紙質、特記すべきことなどの観察を行った。陀羅尼經は一卷が完存しているものもあるが、多くは断簡であるので、小片のたぐいは頁数外として一卷として扱えるものについてのみ頁数を数えた。数えられるものの総数は3076点である。その結果は別表のとおりである。これらの陀羅尼經について注目される諸点をあげると次のようになる。

1. 版が銅か木かという点については、なお結論は得られなかった。版の摺り上がりの状態は墨の濃いものと薄いものとがあり、また、摺る際に文字が出にくかった場合には肉筆で補っている場合がしばしば認められた(124点)。ことに摺りの悪くなるところは、特定の文字のところにも集中するが、一方では、文字の横列、たとえば、行の第一文字に集中するなどの傾向が見られる。なお摺り面は紙の表となっている場合と裏面の場合とがある。 2. 紙質はほとんど黄色染めの麻紙で、薄手と厚手とがある。 3. 陀羅尼經の中には、奥に墨書をもつものがある。墨書には、丈、甲、公、十、万呂、などがみられ、陀羅尼經を摺る際の作業に関係した人名を略記したものではないかと考えられるが、なお未詳としなければならない。この内、丈は相輪の短にのみみられ(12点)、甲は相輪の長にのみ(80点)、公は根本の長にのみ(28点)、十は相輪の短にのみみられる(24点)。また、万呂は自心印の短に(2点)みられる。このような墨書以外にも、宅(802)、生(1788)、正生字(1473)、十日、川十九日上了(1793)、などの記載をもつものがある。 4. また、摺り面を切断して、文字の一部が失われたものがあり、さらに、陀羅尼經の上端ないしは、下端の文字の一部を残したものがあり、ここからみると大きな紙に数種類の經を摺りあげてから一点ごと切り放したことがわかる。 5. 紙の法量については、紙高にかなりバラツキがある。平均5.5cmであるが、6.0cmをこえるもの、4.6cm前後のものもある。切断作業が厳密でなかったことを示している。 6. 用紙はほとんど一紙であるが、まれには続紙になっており、紙継目をもったものがある(382, 772)。 (鬼頭清明)

百萬塔陀羅尼經集計表

根本長 (A・Bを含む)	530点	自心印長	470点	その他
根本短	489点	自心印短	465点	不明分337点
相輪長	319点	六度長	7点	
相輪短	447点	六度短	12点	
小計		2739点		総計 3076点